豐田八十代先生著萬葉地理考を讀みて同先生の教を乞ふ（二）

住登勝藏

かたしはがは（片足羽河）

萬葉（一七四二）「級照るや片足羽河のさにぬりの大橋の上よ云々」

片足羽河は、和漢三才圖會によれば、河内國舟橋川の古名で、古は大橋かゝり、今舟橋となるとある、即ちこの舟橋川を指す。

かたをか（片岡）

萬葉（一〇九九）「片岡の此の向峰（おかつを）に推蒔かば今年の夏の陰になみむか」

著者は「かたをか」は大和國北葛城郡今の王寺村、志都美村、上牧村等の地をいふと推定してゐるが、必しも大和とのみ推斷し難い。山城國愛宕郡加茂の頓丘を片岡といふ。

かたお岡の森・片岡原（大和春日）片岡の里。これ等は固有名詞にあらざるもあり、只何處にても頓丘をいふ。

「馬内侍集」法成寺入道「祈くる我かた岡のちかことをおそくたゝすの神にも有かな」

同返し「逢事をかた岡とのみ思ふ身はなにゝたゝすの神にかくらむ」

これ等はみな、山城の加茂邊のことを讀んだので、たゝすは糺の森を指すのである。萬葉の歌も加茂邊の歌とおもへる。尚ほ春日野といふも、大和の春日野でなく、山城の春日野（京都附近）を指す場合がある。「恵慶集」に春日野の若菜もしるく春きては霞わたれる片岡の原とい

ふ歌がある。これは明らかに大和の春日野を指すやうだが之れも、山城の白河邊の野を指したので、決して奈良の春日野ではないのである。

かとり(香取)

萬葉(一一七二)「いづくにか舟乘りしけむ高島の香取の浦ゆこぎ出來し船」

揖取浦は近江にあることは明らかであるが、同(二四三六)「大船の香取の海にいかりおろしいかなる人か物念はざらむ」

この歌に至りては、仙覺抄には近江とし、八雲御抄には常陸の香取の海とある。又、藻鹽草勅撰名所抄には下總とありて、定說がない。

夫木抄七に岡屋入道攝政家百首爲家「旅衣をりしも春をたちかへてけふは香取の浦に來にけり」とあり光俊は「浪あらき香取の浦の夕汐に渡りかねたる世をなけく哉」とよんでゐる。

要するに香取の海は、常陸とみるべく、香取の浦は近江とみるべきであらう。

かみやま(神山)

萬葉(一五七)「神山の山邊まそ木綿みじか木綿かくのみゆゑに長くと思ひき」

同(三〇一四)神山の山下とよみゆく水の水尾の絶えずば後も吾が妻」

著者は「かみ山」を大和の三輪山と斷ずるが、これは恐らく山城の加茂山を歌つたのであらう但し神山は處々にあるは勿論である。

狹衣物語に「神山の椎柴かくれしのへはそゆうをもかくる加茂のみつかき」とあり。

夫木抄二十には寂觀「神山のみねの瀧つせ清けれはみたらし川の底もすみけり」とある。

即ちみたらし川といひ、加茂のみつかきといひ、明らかに加茂山でなければならない。

相模集に「神山のかしはのくほてさしながらおほなほる身のさかゆべき哉」とある、この「かみ山」は箱根山を指したのである。

萬葉(二一七八)「妻ごもる矢野の神山露霜にほひそめたり散らまく惜しも」この矢野の神山は明らかに出雲國の神山である。

かむなび又はかみなび（神南備）

大和なるは疑を容れないが、「かむなび」といへる歌は萬葉に二十四首もある中に、三輪と見るべきもの四首以上ある。又神南備の三諸の山の帶にせるといへる歌は三首あり、飛鳥の川の帶にせるともいひ、初瀬の川の帶にせるともいつてをる。その中五首は不明だが、「神なびのみむろ」といへるは、もとはみな飛鳥川である。

三輪をは三諸の山ともいひ、飛鳥の山は神なび山といつたやうである。

神なびの三諸とは、三輪にはない。時代によりて言ひならはしとなつたやうである。

因に山城の山崎の西、神南備の杜といふのがある、これは後に「からなひの杜」といふが、元より神なびと讀むべきである。古今集八に「山崎より神なびまで送りに人々まかりて歸り是にて別ををしみて讀める離別の歌がある。筑紫へ下る人を山崎より大和の神南備へ送るべき道理がない、これは山城の神南備である。

かもやま（鴨山）

萬葉（二二三）「鴨山の磐根しまける吾をかも知らにと妹が待ちつゝあらむ」

かも山は、石見の國の山の名であるが、石見の國には山で渡乃山、打歌山、里の名では角の里が萬葉に讀まれてゐる、然るに鴨山といふ山は見當らない、これは妹山のことを指すのでないかと思ふ。人麿の辭世であるが、別の歌に「妹山の岩根に歸る我をかもしらすて妹が待つゝあらん」（拾遺）とある。

かやのやま（可也能山）

萬葉（三六七四）「くさまくら旅をくるしみ戀ひをれば可也能山べにさをしか鳴くも」

この歌は筑前引津の亭に船泊てゝ作れる歌の一つであつて、「かやの山」は筑前の絲島郡にある山の名である。

かりしま（借島）

萬葉（一〇二四）「長門なる奥津借島奥眞經て吾が念ふ君はちとせにもかも」未詳とあるが、

和漢三才圖會によれば、豐浦島一名滿干島當國府中有社南向其東西有遠干潟及澳津二島以干珠滿珠二顆所納故名之。

三島或爲見島在自萩城下亥子方海上十八里。時浦、龜頭、借島、阿須波原、角島迫門。此外名所多有。

按ずるに澳津は即ち滿干島、借島は別の島、奥眞は澳の見島を指したのであらう。

かりはのをぬ(雁羽之小野)

萬葉(三〇四八)「御獵する雁羽之小野の櫟柴のなれはまさらず戀こそまされ」

「かりはのをぬ」は越後の刈羽などにあらず、これは固有名詞ではなく、狩場の小野といふだけである。家隆の歌「もろ人のかりばの小野にふる霞けふの御幸に玉ぞ散りける」とある。但し狩路の小野は大和にある。

きのへ(城の上)

城上は、大和の元と城上郡にあり、この郡は神社佛閣多く、三輪大明神を始め、磯城島金刺宮・磯城島瑞籬宮・長谷川・海拓榴市・痛背川等みなこの郡内にある。(和漢三才圖會)

きへ(寸戸)(伎倍)

萬葉(二五三〇)「璞の寸戸が竹垣編目よも妹し見えなば吾戀ひめやも」

同(三三五四)「伎倍比等のまだらふすまに綿さはだ入りなましもの妹がをどこに」

同(三三五三)「阿良多摩の伎倍のはやしになを立てゝゆきがつましもいもさきだゝね」

「きへ」は著者は遠江とのことであるがきへ人は出羽人のことである。

「きべ」はきのべ(紀部なる姓あり)である。古事記に岐閉國造と有り又續日本紀廢帝紀に出羽國柵戸といふ地名がある。後世木部又は木戸と書く姓が多い。

けひのうみ(飼飯海)(海比海)

萬葉(二五六)「飼飯の浦の庭よくあらし苅薦の亂れ出づ見ゆ海人の釣船」

同(三二〇〇)「飼飯の浦によする白浪しくし

くに妹が、妹が容儀は念ほゆるかも」

一本に、「武庫の海の海上好くあらし漁する海人の釣船浪の上ゆ見ゆ」これ等はみな人麻呂の歌で飼飯の浦は淡路又は紀伊の地である。

明玉集「山をきる劔を嶺に殘しおきて神さひにけり氣比のふる宮」この歌及び萬葉（三二〇〇）の歌は越前の氣比の浦を指す。

こま(狛)(高麗)

萬葉(二四〇五)「垣なす人はいへども狛錦紐ときあけし公ならなくに」

夫木抄定家「泉川日も夕くれの狛錦かたえおちゆく秋のもみぢ葉」

これ等によめる「こま」は三韓の高麗ではなくみな山城相樂郡の狛をよんだのである。山城の狛は瓜どころであつたから「山城の狛わたりを見てしかな瓜つくりける人の垣ねを」（平兼盛集）といふ歌もあり「垣なす人は結へども」は瓜の垣につきてよんだものである。

さくら田(櫻田)

さくら田は、尾張國に限らない、一國一處の名所でなく、櫻の生ひたる田と解すべきである。

萬葉(二七一)櫻田へ鶴鳴き渡る年魚市がた、鹽干にけらし鶴鳴き渡る」とあるから、尾張の國のことには違ないが、果して櫻(愛知郡)といふ地の田なるか疑なしとしない。

さたのうら(左太之浦)

萬葉(三一六〇)「奥つ波邊浪の來よる左太能浦のこのさだ過ぎて後戀ひむかも」

同(三〇二九)「貞能汌に依する白浪あひだなく思ふをいかで妹にあひがたき」

「さたのうら」は、古義にいふ如く、土佐國蹉跎岬の附近とみるを正しとするやうに思ふ。

さみね(狹峯)

萬葉(二二〇)「玉藻吉云々名細狹峯之島の云々」この「さみね島」は、元より讃岐である。その反歌にも佐美の山とて人麻呂の歌があるが、これと同名異所である。

萬葉(二二一)「妻もあらば採みてたげまし佐

美尼山野ノ上のうはぎ過ぎにけらずや」このさみねの山は大和(宇和郡)のことである。

續日本紀三文武天皇慶雲三年秋七月乙丑大倭國宇智郡嶺山火撲滅之とある。

さらしゐ(曝井)

萬葉(一七四五)「三栗の中にめぐれる曝井の絶えず通はむそこに妻もが」

著者はさらし井は、常陸の那珂郡といふが、武藏那珂郡であらう。和漢三才圖會には武藏豐島郡玉川の里に掘兼井といふあり、又讓井(桶町にあり最冷水にて酒造家爭汲む)新井(西新井村)極樂井・逃水等もある。

曝井は調布等を晒すに用ふる井といふ意味で六月に井を浚へかゆるを云ふ。また新井ともいふが、之れ元より地名であつて、萬葉には那賀曝井歌とある。「晒井の木の下陰に見れば衣手寒し蟬はなけども」ともよんである。

しま(島)

萬葉(八六七)「きみが行きけながくなりぬ奈良路なる志滿のこだちも神さびにけり」

同(一七八)「御立たし丶島を見るとき庭たづみ流る丶涙止めぞかねつる」

同(一九六五)「思ふ子が衣摺らむにほひこそ島の榛原秋立たずとも」

同(一七〇)「島の宮匂の池の放鳥あらびなゆきぞ君まさずとも」

「しま」は大和國高市郡庄の地、草壁皇子の宮の在りし處で、匂の池の址もあるとのことなるが、しまは元來山齋即ち庭園・林泉等の意で、水中の島でなく陸上の島(小高地)といふ意味であつて、固有名詞ではないのである。

しらね

萬葉(三四七)「遠しといふ故奈の思良爾にあほしだもあはのへしだもなにこそよされ」

「しらね」は、越(越後)の白根であらふ、古義にいふ如く、故奈は越の誤であらう。

しらやま(之良夜麻)

萬葉(三五〇九)「たくぶすま之良夜麻風のね

なへどもころがおそきのあろこそえきも」

しらやまは、加賀の白山を指すは明らかである。

さわたり（左和多里）

萬葉（三五四〇）「左和多里の手兒にい行きあひ赤駒があがきをはやみ言とはず來ぬ」

これは、東歌であり、駒のことを讀込みたる所よりみて、今の澤渡（福島縣石城附近）を指すと思はれる。

すがのやま（須我能夜麻）

萬葉（四〇一五）「情にはゆるふことなく須我能夜麻すがなくのみやこひわたりなむ」

須加の山は越中（射水郡）にもあるが、出雲國にあること古事記にあり。素鵝郷は日本書紀神代紀にも見る。素戔嗚尊の稲田姫をいさなひて住ませし所を素鵝地といつた。新古今集序に、藤原良經「やまと歌は普く天地ひらけはしめて人のしわざいまださだまらざりし時蘆原の中津國の言の葉として稲田姫すがのさとよりぞつたはれりける。」續古今集序に藤原基家「やまと歌はそれ素鵝の昔のさとには蘆原のことのはを始めて傳へ斑鳩の富のを川には流れをくみて源を尋しよりこのかた」とある。

すみのえ（墨吉）

萬葉（一七四）「春の日の霞めるときに墨吉の岸に出でゐて云々」

墨吉は丹後（熊野郡）と著者はいふが、攝津とみるが至當である。由來浦島の傳說は諸國に在つて然るべきである。日本書紀に丹波國餘社郡（今の丹後）とし丹後風土記にも出てゐるが、墨吉は必丹後に限るべきでない。

すみたかはら（角田河原）

角田河原は前に述べた如く、駿河國廬原郡に在るを指す。新後拾遺集に「我ためは結ひもおかぬいほ崎の角田河原に宿やからまし」等とあり、亦打山・いほ前・角田川みな駿河にあり、八雲御抄にもみな駿河國と註されてある。

たむけ山（手祭）（手向）

萬葉(三一五一)「外のみに君を相見て木綿だたみ手向の山を明日か越えなむ」

同(一〇一七)「木綿疊手向の山を今日越えていづれの野邊にいほりせん吾(あれ)」

この二首は、近江の手向山(即ち相坂山)をよんだので、相坂を越える心である。

夫木抄に源仲正「鳥居たつ相坂山の境なる手向の神に我ないさめぞ」とある。

共に近江の打向山をよんだので、萬葉(一〇一七)は明らかに近江の相坂をよみ、大和の手向山ではない、それで、「紅葉をも花をも折る心をは手向の山の神やしるらむ」とありて、右貫之集にあひ知りたる人の物へ行にぬさやるとてと有るからである。「ゆうたゝみ手向の山の櫻花ぬさも取あへず松風ぞ吹く」この歌は、上の句萬葉よりつゞけ、「ぬさも取あへず」は大和の方の意が勝つてゐる。

萬葉(第三)「佐保過ぎてならの手向におくぬさは妹をめかれするあひ見しめとそ」これは大和手向山をよんだのである。

とにかく、ゆうだゝみ手向の山といふは、近江の相坂山を意味するので、すべて相坂山に手向(祈る)することはさる事で、即ちうちつけに手向の山をけふ越えていづれの野邊にいほりせん吾等とよんだので、上代に奈良の都より近江へ通ふには、宇治川を渉り、あこねの原といふ所から山科のいは田の森等を過ぎて相坂山を越えてゐたことは、萬葉集の長歌に見る。

あるみ(垂水)

おしたるのぬの部で詳述した如く攝津(豐島郡)に在る。

萬葉(一四四二)「いのちをさきくあらむと石流垂水の水をむすびて飲みつ」

同(第七)「哀さち久しきよしもいはそゝくたるみの水をむすびてのみつ」

同(第十三)「石走るたるみの水のはしまやし君にこふらく我こゝろから」

同(第八)「岩そゝくたるみのうへのさわひひ

のもえ出る春に成にけるかも」

とは（十羽）

萬葉（三三四六）「見さくれば雲井に見ゆるうるはしき十羽の松原わく子どもいざ出で見む云々」「とば」は未詳とあるが、大和國（高市郡）に在る方を指すので、山城の鳥羽に關する歌は萬葉集以外に多いがこの集には一つも發見されない。

とやのぬ（等夜乃野）（鳥屋野野）

萬葉（三五二九）（等夜乃野に乎佐藝ねらはりをさをさも、ねなへ子ゆゑに母にころばえ」この歌は東國にてよんだ歌で、恐らく越後（中蒲原郡）の鳥屋野（新潟附近近の村）であらう。古義には下總の鳥矢ならんといつてゐる。

夫木抄家隆の歌にも「立歸りまたもきて見むはし鷹のとや野をいづる秋の夜の月」とある。

とりかひがは（取替河）

萬葉（三〇一九）「浣衣取替河の河よどのよどまむ心思ひかねつも」

この地名は、未詳とあるが、紀伊熊野川筋の鳥飼（又は鳥養）川即ち十津川を指すのであらう。

散木集（二）に、熊野に詣でけるに淀にて舟にのりてくだりけるに鳥かひといへる所にて舟のゐてくだらざりけるに日くれにければ「をきへなき高瀬の舟をさしすゑて鳥飼にてもくらしつるかな」といつてゐる。

ひきつ（引津）

萬葉（一二七七）「梓弓引津のべなるなのりその其の花つむまでにあはざらめやもなのりその花」

同（一九三〇）「梓弓引津のべなる莫告藻の花咲くまでに會はぬ君かも」

なるほど著者のいふ如く、筑前國志麻郡之韓亭に到り、舶泊三日を經て云々、聊以裁歌六首とあり、その次に引津亭舶泊之作歌七首となつてゐるが、當麻大夫陪駕伊勢思姉歌曰と出てゐるから、萬葉十に筑前引津亭と云へる所には非ず、伊勢の引津と見るべきであらう。

ふるや（古屋）

萬葉(三八三三)「虎に乘り古屋を越えて青淵に鮫龍取り來む劒刀もが」

「ふるや」未詳とあるが、え る屋はふる山の誤でないか、ふる山は、袖振山と同所(大和山邊郡)であつて、布留野・布留瀧みな同所である。布留の澤・高橋・社・寺・杜・川みな布留は大和で石上布留と讀めるはその所である。

新撰和歌集に「石上布留野の道の野を分けて清水くみにやまたもかへらむ」狹衣物語(三)に「あかさりしあとやかよふと石上ふる野の道を尋ねてぞ見る」「名歌」公任「おほつかな跡はさなから石上ふるき都はいろこなるらむ」とあつて布留の都といふも大和である。

まつがうら(麻都我宇良)

萬葉(三五五二)「麻都我宇良にさわるうらだちまひとごとおもほすなもろわがもほのすも」未詳とあるが、磐城に松が浦あり、相模にもまつが浦がある。相模集に「しき波は立まさるとも吹こなん心のうちにまつが浦かせ」とある。

まつちやま(亦打山)(待乳山)眞土山)

萬葉(五五)「朝毛吉人ともしも亦打山ゆき來と見らむ樹木ともしも」

亦打山は駿河にあることは前に述べた通りであるが、この歌にある亦打山は大和と紀伊の境にある山であらう。

みしま(三島)

萬葉(一三四八)「三島江の玉江の薦をしめしよりおのがとぞ念ふ未だ苅らねど」

同(二一七六六)「三島江の入江の薦を苅りに吾をば公は念ひたりけれ」

同(第十一)「三島菅いまだ苗なり時またはきすやなりなむ三島菅笠」

三島江・三島川・三島野・三島浦・三島江の浦といへばみな攝津(住吉郡)住吉附近をいふので、三島江に生ずる菅が多かりしものと見えて、三島菅笠に關する歌が多い。

夫木抄上東門院住吉行啓の時小辨「住吉の松もみゆきてありけりとこはめつらしき三島江の

浦」とある。又「續後撰集」に波のうつ三島の浦のうつせ貝むなしきからに我やなりなむ」ともある。

新考に、三島野は越中國射水郡三島とあるがこれは、萬葉(四〇一一、四〇一二、四〇七九)の歌を指す。

みつかは(三津河)(三河)

萬葉(一七一七)「三河の淵瀬もおちずさですに衣手沾れぬ干す兒はなしに」

みつ河は、未詳とあるが、近江にある。即ち拾玉集に「とにかくに身にしむものは神垣やひえの山風三津の川なみ」とあり定信の歌にも「思ひかねその木の下にゆふかけて戀こそ渡れ三津川の橋とあり、拾遺愚草にも亦「たのみこしるしも三津の川淀に今さへ松の風そすゝしき」とある。

攝津に三津もあるが、萬葉に表はれたる三津は近江(滋賀郡)の三津川のみで、三津里・三津の濱・三津浦等みな同一の所である。

みやのせがは(美夜能瀨河泊)

萬葉(三五〇五)「うちひさつ美衣能瀨河泊のかほばなの戀ひてかめらむきそもこよひも」

みやのせ河は、未詳とあるが、これは大和(吉野郡)の宮川を指す。宮川一に宮瀧川また宮瀧ともいふ。この地往時都の在りし所、その皇城の在りし附近を行く川であるから、かく名づけられた。之れは、例へば、宮路山といふと同じく、伊勢の五十鈴川をも宮川といふ。山家集に「瀧おつる吉野の奥の宮川の昔を見けむ跡したははや」とある。

やぬ(矢野)

萬葉(二一七八)「妻ごもる矢野の神山露霜にほひそめたり散らまく惜しも」

矢野の神山は、前に述べた如く出雲であらう。元より矢野なる地名は、伊勢その他各地にあるが、出雲風土記云「八野郷家正北三里二百一十步須佐袁命御子八野若日女命坐之。爾時所造天下大神大穴持命、將娶給爲而、令造屋給、故云

八野」
かやうに八野と書くが、こゝには屋野の意で

あつて、矢野社も同風土記に神門郡に在り、矢野若日女命を祀らる。（完）

房總以西太平洋岸の民族移動に關する歷史地理的考察（豫報）

―伊豆文化の研究　第二報―

耕崎正男

本稿は前稿「駿相豆交界地方の聚落に對する歷史地理的考察」中の「三、文化發展の經路」に傍證を加へて若干詳述したものである。

目　次

一、三島神社及び伊豆の式内社
二、民族移動の因子及び南九州
三、南四國
四、近畿の南岸
五、伊豆に於ける漂着民
六、結　論

一、三島神社及び伊豆の式内社

前述の如く古代民族の部落が出來た後、大和朝廷の勢力の東漸は日本武尊の御東征と云ふが如き形を以て現れ、此の地方が畿内に存在を認められてから、近畿の優等民族が入込んで地方の開拓が進み文化が向上したのである。

但し此の間、漂流民のあつた事を記憶せねばならぬ。即ち屢々南方から漂着したと云ふ古傳があり、又史上に現れて居り尙且伊豆の文化は